

平成26年度資源評価票(ダイジェスト版)

[Top](#) > [資源評価](#) > [平成26年度資源評価](#) > [ダイジェスト版](#)

標準和名 ホッケ

学名 *Pleurogrammus azonus*

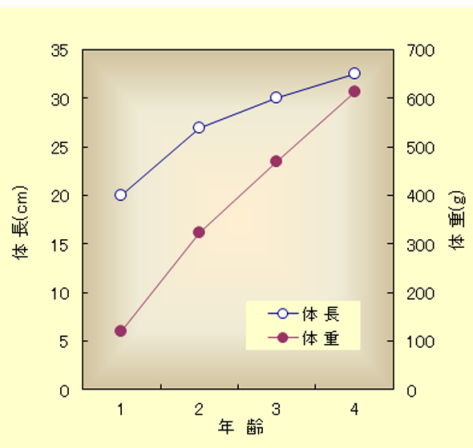
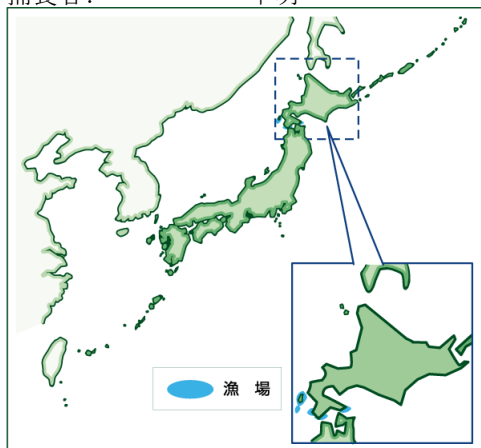
系群名 道南系群

担当水研 北海道区水産研究所



生物学的特性

寿命: 不明
成熟開始年齢: 1歳の終わり(一部)、2歳の終わり(大部分)
産卵期・産卵場: 11～12月、北海道渡島半島西岸および奥尻島沿岸の岩礁域
索餌期・索餌場: 正確な索餌場は不明、分布域は、北海道渡島半島西岸～本州北部日本海および噴火湾～本州北部太平洋
食性: 仔魚期には主にカイアシ類、未成魚期にはヨコエビ類を多く捕食、岩礁周辺で定着生活に移行後は魚類、魚卵、イカ類、エビ類、ヨコエビ類、オキアミ類などを捕食
捕食者: 不明

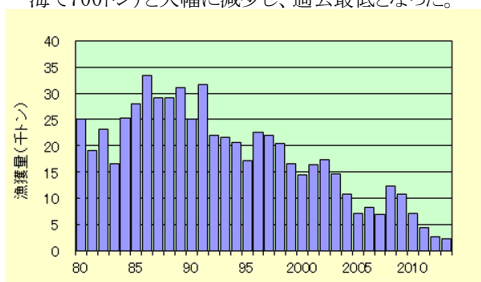


漁業の特徴

ホッケ道南系群は、当該海域の沿岸漁業(刺網、定置網、底建網、まき網、釣り、簗など)でほぼ周年漁獲され、特に春季の索餌期と秋季の産卵期に漁獲量が増加する。本州においては、底びき網でも漁獲される。

漁獲の動向

漁獲量は、1980年代前半に1.7～2.5万トンで推移した後増加し、1980年代後半に3.0万トン前後の高い水準となった。1990年代は2.0万トン前後で推移したが、その後減少し、2007年には0.7万トンとなった。2008、2009年は1.0万トンを超えたが、2012年は2,700トン、2013年は2,300トン(道南日本海で1,000トン、道南太平洋で600トン、本州日本海で700トン)と大幅に減少し、過去最低となった。

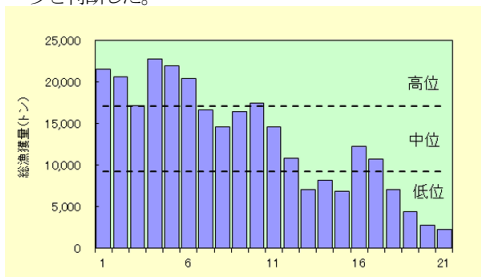


資源評価法

漁獲量の変動が資源動向を反映すると仮定し、漁獲努力量が比較的安定していたと考えられる1993年以降の漁獲量の経年変動傾向から資源の水準と動向を判断した。

資源状態

過去21年間(1993～2013年)の漁獲量の平均値を50とし、35未満を低位、35以上65未満を中位、65以上を高位と設定した。2013年の漁獲量は2,295トンで9となったため、資源水準は低位と判断した。過去5年間(2009～2013年)の漁獲量の推移から、資源動向は減少と判断した。



管理方策

漁獲量の推移から、高水準の1980年代後半から、比較的豊度の高い年級群の発生によって短期的な増加はあるが、長期的には減少傾向が続いている。特に、2002年以降は漁獲量の減少が多くの海域・漁業種で見られ、2009、

2010、2012年級群の豊度が低いことによる資源の減少が危惧される。そのため、漁獲圧の削減などにより漁獲量を抑える事が重要である。ABC算定規則2-2)に従い、ABCを算定した。

	2015年ABC	管理基準	F値	漁獲割合
ABClimit	1.8千トン	$0.7 \cdot \text{Cave-3yr} \cdot 0.83$	-	-
ABCtarget	1.5千トン	$0.8 \cdot 0.7 \cdot \text{Cave-3yr} \cdot 0.83$	-	-

- $\text{ABClimit} = \delta_2 \cdot \text{Cave3-yr} \cdot \gamma_2$ 、 $\text{ABCtarget} = \text{ABClimit} \cdot \alpha$
- Cave3-yrは2011-2013年の平均漁獲量
- $\gamma_2 = 1 + k(b/l)$ 、kは標準値の0.5、bとlは漁獲量の傾きと平均値(直近3年間)

資源評価のまとめ

- 過去21年間の漁獲量の推移から資源の水準を、過去5年間の漁獲量の変化から動向を判断したところ、低位、減少であった
- 漁獲量は長期的に減少傾向にあり、2013年は過去最低であった
- 2009、2010、2012年級群の豊度が低く、資源の減少が危惧される

管理方策のまとめ

- 資源状況は低調なまま推移することが予想されるため、漁獲圧の削減などにより漁獲量を抑えることが重要
- 秋季の海表面水温が高い年には産卵個体群の沿岸への来遊状況が悪くなるため、海洋環境の変化についても注意が必要

執筆者: 森田晶子・濱津友紀・船本鉄一郎

資源評価は毎年更新されます。